

昭和二十八年七月十五日発行(毎月一回・十五日発行)
昭和二十四年七月二十一日第三種郵便物認可

(通第五十二号)

目

とこしへのまことのいのち……………花田正夫…(1)

大無量壽経講話……………福島政雄…(5)

次

あゆみの跡……………臼杆祖山…(10)

慈

光

第五卷

第七號

とこしへのまことのいのち

花 田 正 夫

改訂第三

今を去る七百年の昔、祖師聖人は「われはこれ加古の沙彌教信の定なり」と常に仰せられつつ九十年の生涯を殆ど世にしられるといふこともなしに終られたのであります。沙彌教信は加古川の畔に住み、ただ念佛は有難いこと尊いことと深く信じて、念佛申し申し、人々の走り使ひなどを業として終つたのでありますが、聖人はこの教信を理想として居られたのであります。

その同時代に、憐る平家を壇の浦に亡ぼし去つた源頼朝公は、鎌倉に幕府をひらき、征夷大將軍として飛ぶ鳥おとす勢でありました、三歳の童子も頼朝の名をきけば泣くのをやめたほどであります。

然し星霜は流れ去つて七百年、今日鎌倉の頼朝公の墓前に幾人の人々が随喜の涙にむせんで居るであらうませうか。游子ひとり懐古の涙にむせて、夏草や武者共が夢の跡と歎けるばかりであらうませう。それにひきかへて京都の聖人の廟前に何萬何千の人々が心の底からその広大な恩徳を謝し

まつゝてゐることであらうませうか。

頼朝公は在世中は多くの人々に知られ、威勢は地を揺るたことではありますが、年々歳々に過去の人として忘却の彼方に葬られて行き、聖人は御存命の間は極く僅かの人々に尊ばれて九十年の瘦影を没し給うたのでありますが、年々歳々に其の徳光が地を潤し、人を導いていよいよ渇仰申して行く人々が増して來るのであります。

そこに私は聖人の上に「世の親」の御姿を仰ぐのであります。と申しますのも、世間のことはすべて、遠ざかれば忘れ、離れば疎んじて行くのがその鉄則であります。この鉄則に反するものが子にとつては親の存在であります。親の膝下に居た時よりも遠く離れて親を慕ひ、生前よりも死後になほ恋うてやまぬ趣があります。即ち遠ざかれば遠ざかるほど、離れば離れるほどいよいよ深く強く心に浮彫りせられるのが親であります。

聖人も亦御在世の時よりも御入滅の後になほなほ追慕渇仰せられて居りますことは、正しく聖人こそ「世の親」でありますことの証拠であります。私共はとかく煩惱に眼がくらまされて、唯横にひろがるものを偉大なものとのみ思ひ勝で、縦につながる生命の尊さを見失ひ勝であります。そのために現在の様に聖人の御名が世に流布せられますと聖人を世間一般の偉人と混同し、偶像視して祭りあけることになり勝であります。これでは聖人の眞実の生命をかへつて失ふことになるので、よく謹しまねばなりません。

不滅の生命の誕生

世の親として聖人の生命は何処に誕生せられたのでありませうか。聖人が地上にその不滅の生命を名告り出られた始めが、教行信証の御述作にあることは明らかなことでもあります。一般には聖人五十二歳の時常州稻田の草庵で起草せられたと伝へられて居ります。最近では六十歳以後京都に歸られてから七十歳過ぎの間に出来たものと言はれて居りますが、さうした研究は學者にまかせまして、全身全霊をあけられての聖人の名告りは教行信証の御述作においてなされたことには間違ひがないことでもあります。

さて教行信証は、淨土の教と大行と大信とその証を述べられたのでありますが、これを述作せられます聖人の御心持を特に渇仰申すのであります。

顯淨土眞実教行証文類序

愚禿 釈親鸞述

と自署されてあります。即ち御自ら愚人であり禿人であると先づ述べられて、次に述と書かれてあります。述とは孔夫子の述而篇の言葉で「述べて作らず、集めて大成す」とあります意味で、眞実の道は太古の道であつて日々に新なものである。だからその道はただ述べるだけで、自分が作るとか加へると言ふものではない、さうした無私な孔夫子の心に相通するものがあるので、聖人はそれをそのまま「述」と使用せられてゐるのであります。

我ば愚者なり、禿人なり、唯眞実なる教を頂いてそれを述べるばかりである、かう云ふところに、とこしへのまことのいのちが誕生してゐるのであります。否むしろ、とこしへのまことのいのちのあらはれる時、自然にこの聖人の姿があらはれるのであります。泥中の蓮華の美であります。我は智者なり、善人なり、といふところには不滅の生命は影を没するのであります。

是処にも一般の世間と全くあべこべなものが見出されるのであります。世間一般には井戸の中の蛙と申しまして狭い低い境界しか知らぬ者には將來の見透しも世間の様子も解らぬのでありますが、内外の書を読み、新思潮を涉漁する人には、早くたしかに見透しが出来るのであります。即ち賢くさといふ者は眼さきがよくきくのであります。愚で拙く鈍い者は何時もうしろの方をのこのことについて廻るのが関の山であります。

ところが賢いといふは、愚かであると卑屈になる、その賢とか愚というてゐることがすべて迷であると知らされる時、そこに聖人の愚、聖人の禿といふ境界がひらけて来るのであります。

聖人は愚に徹し、禿に帰られて、そこに淨土眞実の教が即ち、彌陀久遠のまこと、釈迦出世の本意、七高僧の玄意が明かに照し出されて、教行信証が述作されてゐるのであります。古今をつらぬき、天地にみつるまことのいのちを深く頂かれてゐるのであります。これが世の親としての聖人の御徳の淵源であります。

太子に拜するまことのいのち

聖徳太子は三經義疏において「經」といふ字を解釈せら

から樹立せられ、萬民のまことのよるべを定め給うたのであります。このときの御慶びは天地が打ち震うたことでありませう。

太子御滅後千三百餘年の今日、太子の義疏と憲法を拜読申す時、千三百年と云ふ年代の垢や塵がちつとも感ぜられないで、只今現に私共が経験して居る事で、しかもよくもかうまで私共の心の動きを微に入り細に渡つて知り抜かれたものである、全く太子の仰せ通りに、そのまことによつて毎日私共は憂ひ悲しみ苦しんで居りますといふ風に、私共の心の底に太子の御言葉が温くとけて、慈悲となり智慧となつて下さるのであります。斯うしてはてしない生生死死の海に、限りなくさすらひ迷うてやまむ私に、大きな燈炬をかかけて下さり、無限の慈懷におさめとつて下さるのであります。

われらのつひのよるべ

私共は何かを頼りとして生きて居ります。或は名にたより、金をたのみ、愛に生きてゐます。或は内に我身をたより、我が心を力として居ります。然しながらいづれもいづれもつひのよるべではありません。しかし眞実のよるべな

れて「法と調じ、常と調す。聖人のをしへは、また時うつり、俗をあらたむといへども、前主、後賢、その是非をあらたむることあたはざるがゆへに、常と称し、またものの軌則となるが故に、法といふ」と述べられてあります。

又十七憲法の第三條に「篤く三宝をうやまへ。三宝とは佛法僧なり。四生の衆婦、萬国の極宗なり。いづれの世、いづれの人か、この法を貴ばざらん。人はなほだ悪しきものすくなし。よく教ふればしたがふ。それ三宝によりたてまつらば、何をもちてかまがれるを直うせん」と訓へられてをります。

私はこの義疏と憲法の教によりまして、太子の胸に、古今をつらぬき、天地にみつる、まことのいのちが躍動してゐる、活き活きと輝き出てゐることに驚いたのであります。それと共に太子がこれを筆録せられた時、お慶びに、どんなにかおどり上り、おどり上りされたことであらうかと遙祭申したのであります。

推古天皇の太子として、内憂外患、波瀾の如く打ち寄せた時代に、重責を一身に荷はれた太子、惠慈、惠聰の二高僧に師事せられて佛道に深く入られ、三十歳前後の頃、まことの道に徹せられたのであります。そして国是もおのづ

しには不安であり、動乱がつづくのであります。

かつて三頭政治を完遂したシーザーも、一切の部下から捨てられて暗殺せられる時、最も信頼しきつてゐた友の一人が暗殺者であると知つた時、彼は「汝もまた！」と悲痛な言葉を残して地に消えて行きました。然し私共の生活は、自他一切に向つて「汝も亦！」と叫ぶよりほかにないのであります。

この何一つよるべのない、そらごとたわごとまことあることなきに、ただ念佛のみぞまことにておはします、とは聖人の常の仰せのひとつでありました。また太子は、世間虚仮、唯佛是真と申されてゐます。

太子と聖人は、唯佛是真、ただ念佛のみぞまこと、と仰せられてゐるのであります。私共の緊急事は太子と聖人のこの実話をよく聞きまつることであります。

さて「眞実」とは「虚仮」に對するのでありますが、それでは未だ不徹底なのであります。絶対のまことは、まこととならぬものを見抜いて、それを飽く迄も捨てずして、遂にはまことにかなしてしまふことであります。

即ちまこととならぬものと微塵も離れぬまこと、遂にはまこととのかしてしまふことが絶対のまことであります。

大無量壽經講話

福島政雄

正宗分

これから釋尊は法藏菩薩を説かれるのであります。先づ初めに五十三佛をあけられる、その最初の佛について

「乃往過去、久遠無量不可思議、無央數劫に錠光如来、

はれて、道をさとりまで導かれました。

「次に如来まします。光遠・月光・梅檀光・善山・須彌天冠・須彌等曜・月色・正念……師子音・龍音・処世。此の如きの諸佛、皆悉くすでに過ぎ給へり。」

即ち五十三の佛が次々にお出ましになつて、過ぎ行きたまうたのであります。

この五十三佛の御名には夫々の意味があります。光とか香とかは佛の働きの名、さうなつてゐると思ひます。この佛の順序はどうしてであるのか、そのわけは私にはわかりませんが、佛の働きや徳が表はし示されてゐるのであります。

五十三という数について、佛陀の位にまで五十二段があると申しますから、もう一步といふ理屈もつきませうが、兎も角も、五十三佛が、過ぎに過ぎ給ふとは、過去から今日まで無限の時が過ぎてゐる、そこに種々の佛陀の働きがあつた、これが今日の我々に直々の働きを現はして下さる、これだけの佛陀の力が、今日の自分に及んでゐると言ふ心であらうかと感じて居ります。

「爾の時、次に佛ましましき。世自在王如来、應供・等正覺・明行足・善逝・世間解・無上士・調御・丈夫・天人

力と権力の夢に深い眠りを續けて居りますが、敗戦國民のわれらは一日も早くかうした夢から醒めて、眞実のよるべ、つひのよるべを頂いて、我等がなすべき仕事に専念したいことでもあります。

私自身、恢復といふことをたのめない痼疾にやみこやして居ります。然しこれが私には強くはけしい御縁となつてとこしへのまことのいのちといふものをいよいよ感佩申してやまぬことであります。それと共に、このまことのいのちを恵みたまはるといふことがないとしたならば、現に私の全生活が大暗黒の中に転落して了ふのであります。ただ私の全生活がまことのいのちひとつに支へられてゐるのであります。そこに私のつひのよるべを頂いて居ります。

世に興出して、無量の衆生を教化し、度脱し、皆得道せしめて、乃ち滅度を取りたまひき」

遠い遠い過去に、錠光如来が現れて、沢山の衆生をすく

師・佛・世尊と名く」

五十三佛の次に佛が出られ、世自在王如来と申され、その佛の徳を十号と云つて十通りに称へられてあります。

如来とは一如の世界から我々に直接來り給ふ方。應供とは供養を人天から御うけになるに値する方。等正覺とは正しいさとりを得られた方。明行足とは明るい行の満ち足りた方。無明を破られて明るい行を成就せられた方。善逝とはこの世を超越して居られる方。世間解とはこの世を越えた方であるからこの世がよくわかつた方。我々は世間に止まつてゐるから世間が徹底して解らぬが、佛は世をはなれてをられるから世間をよく知り給ふのであります。無上士とはこの上もないお方。調御丈夫とは煩惱を調御しよく調へ給ふ方。天人師とは天も人も師と仰ぐ方。佛とはさとりをひらかれた方。世尊とは世の中の人々から尊みあがめられる方。大体かう云ふ徳を持たれた方であります。

法藏比丘の求道

「時に國王あり、佛の説法を聞きて、心に悦予を懷き、即ち無上正眞道意をおこし、國を棄て、王を捐て、行じて沙門となる。号して法藏と曰ふ。高才勇哲にして世と超意せり」

時に王があつて、世自在王佛の説法を聞き心に悦びを感じ、無上の道を求める心となり、国を棄て王を捐てて沙門となられるのであります。

私が今度の戦争の最中に新京でこの話を青年達にしましたが、当時の青年達はどうしてもここが解らぬと申して居りましたが、敗戦の現在ではよく解つてくれると思ひます。青年達は、例へば日本の天皇が、斯様な「国を棄て王を捐て」といふやうなことをなされるとすると解らぬと言ふのであります。

然し日本の歴史を振りかへると実際に歴代の天皇の上に御苦難がしばしばありました。今日敗戦後に私共が痛切に感じますのは、陛下が追放になられてゐるお姿であります。今回はアメリカと相手ではありますが、今までも閥族などが横暴をして、天皇をさへぎつてゐて、天皇の思召し通りにならなかつたことが多いのであります。さう云ふわけで歴代の天皇の帰佛せられた裏には、非常に悲しい事情があらりになつたと思ひます。かう考へますと「国を棄て、王を捐てて、行じて沙門となる」といふところが解るのであります。

「号して法蔵と曰ふ。高才勇哲にして超異せり」とは、釈尊が法蔵菩薩を御自身が感じて居られる、その菩薩は、おすぐれになり、勇ましい力を持たれた方である、俗世と異つたところを持つてをられると讃歎せられてゐるのであります。

采の御徳の讃歎であり、第二段は法蔵菩薩が同じさとりをひらいて、一つの世界を打ち立てたい、ひらきたいと願はれ、第三段は、その世界にあらゆる衆生を導き入れたい、と願はれてゐるのであります。

「光顔慈々として、威神極りなくまします
是の如きの讃明ともに等しきもの無し

日月摩尼珠光の照耀も
皆悉く隠蔽して、猶しし聚墨のごとし」

ひかりかがやく御貌は、不思議に照り耀いて、そのひかりには、日の光、月の光も遠く及ばない。そのひかりは心のひかりでありまして、日月の光は物に障へられますが、心の光は徹して行くのであります。

「如来の容顔は、世に超え給ひて倫なし
正覚の大音は、十方に響流す」

如来のおすがたは非常にすぐれてゐて、世にならぶものがありませぬ。御声は、正覚の法を述べ給うて、十方に響きわたつてゐられます。

「戒聞 精進 三昧 智慧

ります。

さて法蔵菩薩とはどう言ふ方でありませうか。説法せられる始めから釈尊は、阿彌陀佛の前に帰依する心で述べてをられるのでありますが、法蔵菩薩は阿彌陀佛の因位のお姿であります。すると法蔵といふ名前は何を表はしてあるかと申しますと、一切の法、一切の道が、その生命の中に攝め入れられてゐる。一切の道がそこから現れ出ようとする根元のひそめる生命の姿が法蔵菩薩である。ひそめる生命が教の上に現れる時、阿彌陀佛と申すのであります。令や釈尊は、このひそめる生命が阿彌陀佛として現れて出られる、兩者の生命の關係をお説き下さうとされてゐるのであります。

「世自在王如来のみもとに詣でて佛足を稽首し、右繞三
申し、長跪合掌して、頌を以て讃じて曰く」
法蔵比丘は王佛の前に詣でられ、丁寧な御礼を申し上げて、如来の徳を讃歎せられるのであります。

歎 仏 偈

偈文は大体三段に分れて居ります。第一段は世自在王如

威徳ともがらなく、殊勝希有なり」

よく戒をまもり給うて御名は自然にあがり、おこたりの心もなく、心をしづめられて、御智慧は明かに輝いて、その威徳はならぶものもなくすぐれ給うて、世にめつたに見られませぬ。

「深く諦に善く、諸佛の法海を念じ
深を窮め、奥を尽して、其の涯底を究む」

深くあきらかによく、諸佛の道を心に念じて、おさめ入れて居られ、深くその底まできはめつくして居られます。

「無明と欲と怒とは世尊には永く無し」

心の暗さや種々の欲や怒りといふものから世尊ははなれてゐられます。

「入雄師子 神徳無量なり
功勳廣大にして 智慧深妙なり
光明威相大千を震動す」

人雄とは精神的英雄で、師子王の如くまします。その不

思議な御徳はかりしることが出来ません。功勳とはいさほしのことで、それが廣大無辺であり、御智慧は深く妙にすぐれたまうて、御身から放たれる光明は、三千大千世界をふるひ動かしてゐられます。

「願はくば我作佛して聖法王にひとしく生死を過度して解脱せざるなけん」

法藏比丘の願ひであります。聖法王とひとしくなり、生死の迷ひをすくひとけて、必ずさとの世界に導き入れたいと願つてやみません。

「布施 調意 戒 忍 精進。斯くの如き三昧と智慧とをすぐれたりとせん」

布施を行ひ、戒をたもち、よく堪えて、何処までも精進をつづけ、種々と心を調へてすぐれた智慧をもち、寂かな落着いた心を以て行きたいと思ひます。

「吾誓ひて佛を得んに、普くこの願を行じ一切の恐懼の為に大安を作さん」

私が佛のさとりをひらきましたならば、これ等の願を、あまねくやり遂げて、一切のおそれあるものに、大いなるやすらぎをあたへたいと誓ひます。

「たとひ佛しまして、百千億萬、

さうした国に導き入れて、あらゆる衆生を救ひ送りたいと願ひます。

「十方より来生せんもの、心悅ばしく、清淨にして、すでに我が国に到らば、快樂安穩ならしめん」

この我が国に、十方の世界から生れて来ようとする者は皆心はよるこびにみち、清かとなり、すでに我國に生れたならば、たのしくやすらかにさせたいと存じます。

「幸はくば 佛信明したまへ是れ我が眞証なり。」

彼に発願して、所欲を力精せん十方の世尊、智慧無碍にまします常に此の尊をして、我が心行を知らしめん

あゆみの跡

大正三年一月二十七日

南無阿彌陀佛

拜呈、年来の御病氣も未だ平癒これなき由承り候。誠に

無量の大量、数恒沙の如くならんに。

道を求めて、堅正にして却かざらんにはしかず」たとへ恒河の砂の数ほどの、無量の諸佛を供養するよるも、飽くまでも道を求めて行くことが大切と思ひます。

「たとへば恒河の如き諸佛の世界、

またかぞふべからざる無数の刹土あらんに、光明ことごとく照し、此の諸の国にあまねからん斯くの如く精進にして、威神量り難からん」

恒沙の砂のあらゆる国々まで光明が照り輝いて、光があまねく行きわたらせたいと思ひます。この様に一筋に道に進んで、威徳、神力が量り難いものになりたい。

「我作佛せんに、国土をして第一ならしめ其の衆奇妙にして、道場超絶せん国泥洹の如くにして、等雙無からしめん」

私が成佛しましたならば、その国は世上にならぶものがないやうにしたい。またその国の衆生はたへにすぐれてゐて、そこにある道場も、世に超えすぐれたものにしたいたものであります。そして国はネハンのしづけさをもつて、永遠の平和の国としてならぶものない世界でありたいと思ひます。

「我まさに哀愍して、一切を度脱すべし」

たとひ身を諸の苦毒の中におくとも

我が行は精進にして忍んで終に悔いざらん」

世自在王佛よ。よく受け容れて下さい。これが私の有りのままであります。この願で一生懸命につとめたいと思ひます。十方の諸佛方は智慧がすぐれてゐられますことゆゑどんなことも碍りなく御照し下さることでありませう。私はどんな苦にあひましても、飽迄も一筋に進みまして、ちつとも後悔することはありません。

以上が數佛偈の大略であります。私共も佛前で何時もくりかへして拜読して居ります。そして、飽くまでも明るい世界を知らされます。非常に明るく、向ふから無限の光明が、私にそがれ、私の前に明るく天地がひらかれて来る心持で読ませて頂いて居ります。

休 憩。

白杵祖山

人生は一大病院に候。所謂病める人のみが病人にあらず、健全にして働きつつある人も、亦ひとしく是れ病めることの多き習ひに候。我に病患なし、健全なりと誇れるものの

中に於きて、かへつて病褥に吟呻しつゝある身の病者よりも、最も恐るべき心の病人なるもの多く候。

身の病者は苦痛は即ち苦痛に候。不幸は即ち不幸に候。誠に自身として本より堪ふべからざる幽愁にして、そこにまた同情哀憐の堪へがたき切なるを覚え候。さりながら之より、これを動機因縁として、飄然として、自ら永遠に無窮にいやす可からざりし無明昏暗の心病を根本に照破いたし候ことは、苦痛を除かずして、安樂を感じ、不幸のままに光榮を覚へられ候。これ我等人世の病院のまゝが大無上の樂園となり候。

さらばこの心機一転は他に更に道ある如く候、唯一南無阿彌陀佛に事足り申し候。

救済など申して別の事のやうに思ひ為され候は浅間敷きことに候。病苦をおさへて無理に自心に念願をこめて、救済を請ひ求むるやうの心象は沙汰の限りに候。「それは決して請ひ求むるにあらずして、佛の大慈悲のすでに我等に同体同等、一心一如したまへる尊さを仰ぎ称へあらはすばかりに候。

されば坐せる膝の下、臥せる褥の下、ただにその下にのべ差し入れられたりといふにあらず、我等の身も心もすでに南無阿彌陀佛になりかへ居ることに候。君が自ら病ありと思ふ身も、自ら悩みに沈むと思ふ心も、自ら知らざるまに同和圓融せる大慈大悲にてましますことを仰ぐべき尊

何卒時に触れ縁に遇ひて御念佛せさせらるべく候。重ねて述べ、御念佛は君と佛との同心一如体の顯現に候。君の声といふまに、佛の音声の如実体に候。この最大尊重なる念佛こそ、君が自から知り得ざる一如体にてまた求めざる救済に候。

南無阿彌陀佛。

世間一大病院なり。人は一大患者なり。佛陀は一大医王なり。聖衆は一大看護者なり。我等はこの一大病患におかされて、この一大病院に入れり、以てこの一大医王に救済せられ、この大聖衆に看護せらる。ア病患、病院の徳の偉大なるを自己に對して感謝せざるを得ず。

南無阿彌陀佛。

世に法喜禪悦ほど尊き欲びはなし、世に称名念佛ほど尊き声はなし、この無尽の大宝珠を自ら常に心にも口にも称念する人ほど幸福なるはなし。

善惡相對の善は善なるべしと雖も、蓋し徒らに隔歴心頭に孤立せるものにして、惡を融照和会して一相一如を証すること能はず、これによつて善はとしへに善にして、惡に融会して救済平等の大任を尽すこと能はず。ここに最も心を留むべきは、相對小善を脱して絕對大善に洞達すべき

き極まりに候。これを御聖教に「身も南無阿彌陀佛、こころも南無阿彌陀佛なりとおもふべきなり」と仰せ候。これは外ならぬ君が身に心にもみちみちたまへること、今の病褥中より永遠無窮の恩徳に一体同化されて、君と佛との隔てなきことに候。このことを救済攝化と申すことにて別なることはりなどはなきことに候。これ以上の尊さと喜びは絶えて外には無く候、よくよく仰ぐべき事に候。

恰も君の兩親を思ふとき、胎内より、また生れ出でて赤子の時など、自ら一切を知らず、また職るといふ意思を有たざりし時、兩親の深厚なる養育等に由りて、始めて無言の中に、無心の間に、父母といふ言葉なきまに、意識なきまに、一種の衝動を蕩發せしめられて、遂に父母等を思慕し自覺するに至れることに候。

然るに未だ思慕の念もなく自覺の明もなき時に於て、すでに兩親は如何に愛護し扶養せられしか、それは單なる愛護扶養でなく、全く同心一体であることを思ふべきことで、正しくそれ以外にては無之候。

斯くの如く未だかつて知らざる以前より一如一体の父母に攝取せられ居たる事實を信ずることに候。すべてを知り得ての上の喜びも尊かるべく候も、また何一つとして知り得ざる時に於きて、確実に明快に知ろし召されたることの、喜びなき喜び、尊みなき尊みは、最も広大不可思議に候。

ことは是れなり。

相對小善に孤立して独済を樂しむは易く、されども絕對大善に體達して救世を樂むは難し。

たとひ彼に隔歴差別の意ありとも、我れは一味平等の心を以て仰へ、彼れの邪僻の上には正誼の同情をそそぎ、彼れの惡性の上には善巧の慈悲を垂るべし。

然るにその正誼の同情、善巧の慈悲は、我れに一毫の量だにもなし、何ぞ以て彼れを德化するの任務を果すことを得ん。これによつて唯だ如來無限の同情慈悲の光威力に由らずんば將たまた之を如何せん。これに於て始めて絕對大善は道味せらるべし。

喜者に對する溫情より惡者に對して更に一層の教誡をこめざるべからず。

煩惱に眼さへられて、見るべきものを見ることの出来ない悩みを懷く人にして、始めて大悲ものうきことなく常に我が身を照したまへることの尊さを深刻に切実に愛樂するものである。されば見ざることは見る以上に透過の境地に体達し、稱へざるは稱へる以上に滲透の兆域に融入して居る尊さが仰がれる。

○
称ふるものが閉ぢ塞けられて称へられないことに悩みを持つことは、稱ふるものを思ふ存分に稱へるよりも深刻な道味がある。この悩みに活かされる処に懺悔と歎喜がある。この懺悔と歎喜こそは、一進一退を総合したる進行曲である。

○
たとひ虚飾的道心者たるとも、道心の虚飾者たること勿れ。虚飾的道心者は或は真摯なる道心者たる期あるべけれども、道心の虚飾者は殆んど欺瞞なる道心者たるに終るべし。

思ふに虚飾的道心者は多くは在俗の人にあり、故に廻心の機あり。然るに道心の虚飾者は多くは僧侶の身にあり、僧侶の身は常に我見我慢に執着して殆ど廻心の機なし、世に最も憐むべきは僧侶にして我等もまたその一隅に寄せられたるものなることを思ふ時、自分自身の最も戒愼すべく恐懼すべき大事なりとす。

南無阿彌陀佛。

○
世事の萬般に於て、その手段の巧妙なるものは、それが巧妙なれば巧妙なるほど、その精神内容は必らず陋劣なるものあり、是れ世の他の人の如何を言ふにあらずして、現

以て自己を照破すべき大事なり。

○
南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

南無阿彌陀佛こそ眞に我が希望なり、本願なり、光明なり、智慧なり、慰安なり、慈愛なり、道場なり、說法なり、一身なり、一家なり、国家なり、天下なり。一心すでに此に達す、我等またまに何をか言はん、唯だ南無阿彌陀佛。

○
彼の相手の人の怒れるは、我が自身の心の反影なることを思はずして、彼れの怒りに対して、我もまた忿激するといふことである。是れ恰も水の瀕に投じて、ますます水勢を激発せしむるごとくである。

更に思はねばならぬ。衣服に刺鋒は無きものと知るべし然るに衣服の袈裟縫ひたるは、必ず荆棘などのあるに由るなり。彼の衣服の刺鋒のあるにあらずして我れの荆棘にこそ刺鋒はあるなり。

○
されば我れこそ刺鋒あるものなれば、我れ自から怒る前に、先づ彼れを怒らせたるは誰なるかを思ふべきである。

○
我等常に疾病者を教化し慰藉せんと思へり、然るにかへつて彼の疾病者によりて、我等自身こそ教導せられ奮勵せ

に我身に取りての大事なり。

自ら信ぜずして信仰を叫び
自ら修めずして修養を説き
自ら学ばずして究理を談す

○
心卑陋にして唯身の尊大を保たんと願ひ
心貪欲にして唯身の華美を装はんと願ひ
心拙劣にして唯口の巧妙を飾らんと願ひ
心闇愚にして唯口の伶俐を漁らんと願ひ
心麤惡にして唯身口に依りて親善を謀り
心乱雜にして唯身口に依りて真純を装ふ
心邪僻にして唯身口に依りて正義を装す

○
斯くの如き心情を以て道は伝へられ法は説かれつつある現今である。苟くも道を修め法を説くものは、その人自体が道たるべく法たるべし。さなくば邪道にしてまた死法なり。

○
ここに自分自身をかへり見るに、自ら道を修むるなど言ひつつ其の心陋劣なり、自ら法を説くなど言ひつつ其の心闇愚なり。かくの如きを以てかくの如きを為さんとするを愧ぢ且つ恐れざるべからず。

世に對し人に向ふ眼眸を、先づ自己にかへして凝視し、

しめられることの偉大にして且つ尊重なることを想ひ到らしめられたり。

○
我等常に世間相常住など口口に語れども、その眞意を體せず、しかして有爲転変、生死輪廻、これこの世間相の常住の相なることを知り得ざりしなり。

我等生々世々、常に生死の中にありながら、其の生の眞意を知らず、また死の眞意を識らず、是れ他なし、自ら迷妄の致すところなり。

○
女珠菩薩が維摩居士の疾を問ひしに、かへつて慰問を受けたる疾病者の居士に向つて、疾を問ふの方法を尋ねられたるは、是れ全く慰問者の女珠が疾病者の維摩に啓發せられ、教訓されたる眞狀を明かされたる尊き道味である。

○
意義なき自殺などの、死の無益なるを知るものあり。されど意義なき生存の無益なるを知るものはすくなし。これ正しく自分であることに気づかされて慚愧々々。

THE UNIVERSITY OF CHICAGO PRESS

私はここに雲山童子の求道の姿を思ひ
浮べるのであります。半偈の法を聞く
に生命を捨て、その半偈を木に刻み、地
に印して世に残さうとする童子の心を想
ひおこすのであります。きびしい人生の
故に烈しい力で教も残されて居るのであ
ります。

花開く時蝶が出て来ます。若し蝶が出て花がなくなるとは、或は花は開いても蝶が居ないのさびどくなることでありませうか。人生のさびしさを観じ、それと共に佛心の狂乱の所爲多きことを我身に感懐申すことであります。

△大無量壽經の御講話は、いよいよ序分を終りまして正宗分に入り、數佛偈の讚仰を頂きまして、御障りの多い午を二ヶ年に渡りまして隔月御講話を頂き次回か

△一歩みの跡は今はずに故人となら
れました。九州に生れて、長い間佐伯定
胤先生につかれて唯識学を究められ、そ
の後別府の東陽和の下で真宗学をおさ
められた老師であります。老師の死を聞
かれました佐伯老師は片手を失つたやう
ですと悲しまれた由であります。
徳香高い芳書を遺じまして老師の信徳
に浴することであります。

△「とこしへのまことのいのち」が愚と
 死と還るといふ聖人の神心の底にひら
 出てゐることを感じ、第かにもそのま
 が時を超え所をこへて常にかきたいの
 として働きをあらはすことに唯々驚嘆の
 外なく不思議と申すばかりであります。

泡沫のいのち、はかない人生にあひな
 がら不増不減、不滅不変のまことのいの
 ちを賜はることによりまして、この人生
 が無上の莊嚴を被むることあります。

1

振替口座 名古屋一〇四七〇番

慈光第五卷第五号 昭和二十八年七月十五日 発行(毎月一回十五日発行)
昭和二十四年七月二十一日 第三種郵便物認可